

会 議 内 容 (要点記録)

○レポート

テーマ：「青少年（中高生）の居場所作り」

①県内及び地域状況と「少年指導委員」の取り組み

講師：東入間警察署生活安全課少年係 高橋藤明氏

- ・少年犯罪が低年齢化している実態の報告。
- ・「少年指導委員」の「立ち直り支援」を重視した取り組みについて報告。埼玉県公安委員会が委嘱し、東入間警察署管内でも「夜回りパトロール」「有害環境の除去」「登校の声掛け活動（現在富士見市内では数校実施中。）」など多角的に活動している。基本は月三回の定例活動として行っている。

②関沢児童館事業の経過、取り組み状況

講師：NPO 法人ふじみっこ・夢みらい 本橋千賀子氏

- ・現在の中高生世代の児童館夜間開館の状況は、月一回・第三土曜日の午後9時までとなっている。利用年齢は、中学一年生から27歳と幅があり、年齢の垣根を越えた交流がある。
- ・平成17年度より埼玉県のモデル事業として開始し、県内4自治体のモデル事業の一つだった。
- ・「学童保育」として使用していた部屋を集いの場として提供した。
- ・ボランティア活動を拡大したりする中で、「遊びの出前」を実施し、ボランティアサークル「あそびの夢ひろげ隊」として活動するようになった。様々な体験を通した夢中で遊べる空間等が必要と感じている。
- ・それぞれの子どもが、これまでの成長の中でやり残したことを意識しながら、ルールやマナーなど基本的な生活習慣も含め集団の中での学ぶ場ともなっている。児童館は、そうしたことへの「受け皿」でもあると認識している。諏訪児童館でも午後6時まで開館しているが、青少年（中高生）の居場所となっている。「子どもを守る」ことが児童館のメインの役割であることを認識しつつ事業を展開していきたい。

○青少年健全育成について意見交換

会長：どうもありがとうございました。それではこれから青少年の健全育成について、本日のレポートをふまえて、委員の皆さんが日頃感じていることについて意見交換をお願いします。

委員：子どもを守る方向性について考えさせられた。見逃してしまった時や、身近に起こってしまった時、どんな形で対応していくのか。皆さんはどう考えるか。

委員：集団生活のスムーズな運営には、ルールが必然的に構築される。その集団のルール、暗黙のルール、例えば食事の時にもルールがあるが、いきなり怒るのではなく、「A君はこうだが、B君はどう思う？」という討論の場を醸成していくことへの地道な努力が必要と感じている。

講師：家庭的に問題があるケースもある。親に何かを言ったことで親子関係が悪化するケースもある。親に伝えないほうがうまく行くケースもある。

委員：ケース・バイ・ケースなのではないか。成長に合わせた対応やその子の様子を見ながらの対応が大切。小学校や子ども、家庭の状況を見ながら対応していくことが大事。寄り添う姿勢が大事。その中で保護者との話し合いを深めていく。

委員：それぞれへの対応が大事。親は変わらない。子どもを変えていかないとだめなのではないか。親が変わればと思うが中々変わらない。

委員：学校は同年齢の集団、そういうことでは指示しやすい。しかし見方によっては、子どもにとって窮屈な場所とも言える。自分を出しにくい。児童館は異年齢集団。自己を解放しやすい。自己規制がゆるむが上に起きやすいこともある。そういう児童館では指導員の専門性が試される。

委員：子どもは学校にいる時と地域の時とで顔が違って見える。大人が子どもに寄り添うだけでなく、子ども同士で話し合うことが大切である。子どもは自分たちの力で学習し、成長できる。子どもは自らが考え、対応することが重要である。

委員：学校の中だとカリキュラムなどが設定されており、自由な空間は作れない。どこでどういう方法でというのが難しい。児童館のような学校以外の地域活動の場の提供が大事である。

委員：こんなことがあったらどうするというケーススタディの必要性が大事。高校生や大学生は子どもたちの意見をうまく引き出してくれる。

委員：小学校の活動が各学年ごとになっている。かつては登校だけではなく、下校後も異年齢と遊んでいた。年上とのコミュニケーションが養われていた。今は塾などに追われ、個々のライフスタイルの多様化から共通性が失われ、異世代交流がなくなってきた。そしてコミュニケーション能力がなくなってきた。これが社会に出てからの問題になっていく。異世代の人たちと交流できる場が大切。

委員：社会教育の立場でお話したい。公民館では、異年齢集団において違いを認め合う取り組みを行っている。青空学校などお兄さんお姉さんが交流を凶っている。卒業生が指導者となり、お互いに広がっていく輪もできている。一週間や一ヶ月に一日の触れ合いの中で、均一でなく違いを認め合う。そのことが犯罪を防いでいく。また、地域子ども教室では各小学校区で地域の方たちが協力して行っている。見守り、助け合う、支えあうことの大切さを学び合っている。

委員：そんなに居場所がない子ばかりでもないと思う。居場所を持てる子に育てることが大切。建物だけたくさん作っても来れない子は来れない。どう手を差し伸べて受け皿を作るか。

委員：中学生が幼稚園・保育所との交流など、もっとたくさんできれば人間関係・異年齢集団の育成ができる。みんなができる方法を考えたらと思う。

委員：旧上沢小学校の時代から、つるせ台小学校と富士見高校との交流は11年目になる。交流を広げている。また、中学生が毎年三日間社会体験を行っている。貴重な体験で、色々な世代とのコミュニケーションを作っている。色々な場面で色々なことをやっている。

委員：公民館の長年蓄積してきたノウハウを児童館に伝えていくことができるのかどうか。

講師：民間にゆだねられた良さ、垣根が取れてきた。どうぞ教えてください、というのを今だからこそできそうだと思う。

委員：今取り組まれていること、ベース作りを大切にしていく。新たなことを始めるのではなく、子どもの話を聞く、考えさせることが大切。青少年相談員では、年3～4回の事業を行っているが、短い時間の中でどう子どもたちと関係を作っていくかを考えている。この年頃では、悪いことをすることが格好いいというような思いがあるが、それは格好悪いことだという意識を作っていく事が大事だ。

委員：これであきらめないことの大切さや、継続的に関わること。子どもを通してどこまで踏み込んでいいのかという問題を深く考えた。地域子ども教室は全学校区でできている。今あるものを充実して広げていくことが大切。青少年の組織を団体・場所などを整理して見直すことも必要。少年指導委員にも興味を持った。

委員：色々な意見が出てきた。児童館というのは、小学生だけの利用かと思っていた。中学生から27歳までの青少年が、居場所を求めて児童館に行っていた。成長につながる活動が見える。児童館の存在意義が見えてきた。昔は異年齢集団があり、見守る大人たちもいた。地域のコミュニティの崩壊の中、児童館のあり方、自己肯定感や自尊感情を育てていくこと、再構築をしていくことが大切だと思った。

講師：児童館としては、建物の中の活動だけではなく、地域に意図的に行く体制を作っていくことが必要だと考えている。そのための工夫を最大限行い、良いことは伸ばし、見直すべきところは見直して、児童館が青少年を含め子どもたち皆の集う場になっていくように努力していきたい。

会長：それでは時間となりましたので協議会を終了いたします。今回の協議会で得たものをそれぞれの委員さんがそれぞれの場で活かしてもらえればと思います。どうもありがとうございました。